

講演 Conférence 1  
(japonais)

世界文学の時代：  
ラテンアメリカ文学のひとつの首都パリ

講師：柳原孝敦（東京大学・スペイン語文学・思想文化論）

受験のための功利的勉強を強いられた若者たちは、実は真に精神的グレードの高い知的営みにかつえています。この潜在需要をすくい出して有為の文学支持者を育てるためには国別対抗の意識はふさわしくありません。フランス語教育関係者も「世界文学」とそのフランス語支部とを盛り立てるような気持ちでフランス語教育振興にあたるべき時代です。

柳原孝敦氏は今日日本において「世界文学」の主導的立場におられます。氏のラテンアメリカ文学についてのお話は、世界におけるフランス語、フランス語文学のポジションを再確認して、フランス語を教育するモチベーションを高めるよいきっかけとなるはずです。

司会：粕谷雄一（金沢大学）

- 要旨 -

かつてラテンアメリカの作家たちはパリを目指した。しかし、今、その求心力はパリにはないという者もいる。パリを首都とする「世界文学共和国」を想定したパスカル・カザノヴァですら、現在は移行の段階にあり、「主にロンドンやニューヨーク、だがまたもう少し小さな尺度では、ローマ、バルセロナ、フランクフルトなどが文学の覇権をパリと争う複数中心的な多元主義の世界へと移りつつある」との観測を述べている。パリは文学の首都であることをやめたのだろうか？

カザノヴァの『世界文学共和国』は、近年、外国文学の研究者たちの間で口の端に上ることの多い「世界文学」という概念を論じるさいに引き合いに出される基本文献のひとつだ。「世界文学」の理論家であるデイヴィッド・ダムロッシュによれば、「世界文学」とは読みのモードであり、流通の過程であり、翻訳によって豊かになるものだ。カザノヴァの議論も主に流通や翻訳のトピックにかかわっている。しかし、では当の作家たちとの関係についての考察はどうなったのだろうか？ 文学を論じるさいの重点が作者から読者に移ってから久しいとはいえ、「世界文学」の「共和国」を考察するのに、作家たちをないがしろにするわけにはいかない。彼らがどこにいて、どこを書いているか、そしてまたどこを思っているか、そうしたことも考察の対象にならなければならないはずだ。ラテンアメリカの作家たちの居住地として、描写の対象として、想定や思慕の対象としてのパリについてまだまだ語るべきことは多い。

亡命者として、外交官として、メディアの特派員として、学生としてパリに居住したラテンアメリカの作家たちは多い。彼らについてのエピソードも多数知られている。それらの作家たちが、では、作品内にどのようにパリを描いたか、そしてまたどのようにパリを思い描いたかとなると、語られることは少ないと思う。「世界文学共和国」というカザノヴァの想定を通して、ラテンアメリカの作家たちとパリとの関わりを考え直してみる。

中心的に扱うのはパリとパリ文壇に深く入り込んだアルフォンソ・レイエスとアレホ・カルペンティエールではあるが、コルタサルが、ボラーニョが描いたパリ、「マジック・リアリズム」、そしてそもそも「ラテンアメリカ」の理念の揺籃の地としてのパリなどとして捉え直してみよう。

